

OB 訪問

今回は、在宅ケアの拠点、多職種連携教育の拠点として本学が2015年12月に開設した「地域包括ケアセンター」で介護支援専門員(ケアマネジャー)として活躍する峯岸さんを訪ねました。

北海道医療大学居宅介護支援事業所 (地域包括ケアセンター内)管理者・介護支援専門員

峯岸 高裕さん (看護福祉学部臨床福祉学科2007年3月卒業、大学院
看護福祉学研究科臨床福祉学専攻修士課程2015年3月修了)



チームをコーディネート

札幌あいの里キャンパスの地域包括ケアセンターは、病院や福祉施設を中心に提供されてきた医療、介護などのサービスを在宅で受けられる地域社会づくりの要となる施設です。峯岸さんは40人弱の利用者さんを担当、個々の課題に応じて各分野の専門職をコーディネートし、オーダーメイドの在宅ケアを組み立て、常にチームの力が最大値になるよう細かな修正を加えアップデートしています。定期モニタリングに臨時訪問を加え1日の平均訪問数は3、4軒。取材日に同行させていただいた利用者さん宅は、峯岸さんの仕事の魅力を雄弁に語る在宅ケアの現場でした。



同センターは訪問看護ステーションを併設。峯岸さんの隣は看護学科卒の由良(いであ)美香さん、一番左は大学院修了生で皮膚・排泄ケア認定看護師の佐藤明子さんです。訪問看護師のもつ情報量は膨大、日々の共有が欠かせません。

寝たきりを防ぐ

ベッドから車椅子に自力で移乗して迎えてくれたYさん。2年ほど前に危篤状態に陥ってほぼ寝たきり状態になった方です。入院先の病院で「自宅に戻ることは無理」と判断されましたが、本人、同居の妹さんが在宅ケアを強く希望したため、峯岸さんが関わることになりま



峯岸さんに信頼を寄せたYさんは、本学の実習にも快く協力してくださっています。もうすぐ来る妹さんの誕生日は家族が集まって焼き肉店で祝うそう。「3年ぶりの外食」と顔を輝かせるYさんがQOL(クオリティオブライフ/生活の質)の重さを教えてくれます。

した。峯岸さんは、医師・歯科医師の往診、訪問看護師(健康管理と自宅リハビリテーション)、訪問薬剤師、ヘルパー、デイケア(リハビリテーション)を組み合わせ、本人・家族と専門職が一つになって「車椅子を使えるように」「自力でタクシーに乗れるように」という各段階の目標へ向かう道筋をつけました。寝たきりになるかもしれないYさんは、いまは外での杖を使った歩行訓練も始めています。

責任の重さがやりがい

本人の意志と各専門職の総合力が存分に発揮されるためには、利用者さんに寄り添うという思いだけでなく、厳しく冷静に判断する目が要求されるといいます。「Yさんのケースも、本人と家族の意志に揺れないことを何度も確認し、医療・介護の専門職と『必ずできる』という確信が得られるまで検討を重ねました。同居の妹さんとの共倒れを招いてはなりません。判断を誤れば世帯を壊しかねない仕事であることを常に肝に銘じています」と峯岸さん。他者の人生に大きな影響を与える責任の重さこそ「何物にも代え難い、この仕事のやりがいです」とさっぱりと言います。

アカデミックな視点を

峯岸さんは前職の札幌市社会福祉協議会勤務中に、現場を離れることなく大学院に入学、修士課程を修了しました。在学中は夜11時から机に向かうこともしばしばだったといいます。「そこまでしてどうして学問を?」の問いに「福祉現場の多様な課題を解決するためには、経験だけではなく学術的な分析や考察が不可欠と感じたからです」と峯岸さん。大学院では福祉疫学に着目し、現場の課題に対して統計分析を用いた研究活動を行いました。「福祉の専門職が現場と学術分野をフレキシブルに行き来できるようになれば、福祉はもっとよくなる、とも考えています」。現在は大学院の特別講師として後輩の指導にもあたる峯岸さんの視野の広さと多方面からのアプローチが、住みやすい地域社会づくりに生かされていくこれからはが楽しみです。



学部卒業後は有料老人ホーム、札幌市社会福祉協議会で4年ずつキャリアを積んで現職に。前職での高齢者の虐待問題、消費者被害防止の経験と修士課程修了が買われ、現在の職場から声がかかりました。